

学士課程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

文学部

1. 評価結果一覧

自己点検・評価単位	分析 項目 1-1-1	分析 項目 2-1-1	分析 項目 2-1-2	分析 項目 2-2-1	分析 項目 2-2-2	分析 項目 3-1-1	分析 項目 4-1-1	分析 項目 4-2-1	分析 項目 4-2-2	分析 項目 5-1-1	分析 項目 5-1-2	分析 項目 5-2-1
学部	⑤	④	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	④	⑤	⑤	⑤
哲学・思想文化 学プログラム												
歴史学プログ ラム												
地理学・考古 学・文化財学プ ログラム												
日本・中国文学 語学プログラ ム												
欧米文学語 学・言語学プロ グラム												

自己点検・評価単位	分析 項目 6-1-1	分析 項目 6-2-1	分析 項目 6-3-1	分析 項目 6-3-2	分析 項目 6-3-3	分析 項目 6-4-1	分析 項目 6-4-2	分析 項目 6-4-3	分析 項目 6-5-1	分析 項目 6-6-1	分析 項目 6-6-2	分析 項目 6-6-3
学部					⑤				⑤			
哲学・思想文化 学プログラム	⑤	⑤	⑤	④		⑤	⑤	④		④	④	④
歴史学プログ ラム	⑤	⑤	⑤	④		④	⑤	④		④	④	④
地理学・考古 学・文化財学プ ログラム	⑤	⑤	⑤	④		④	⑤	④		④	④	④
日本・中国文学	⑤	⑤	⑤	④		④	⑤	④		④	④	④

語学プログラム												
欧米文学語学・言語学プログラム	⑤	⑤	⑤	④		④	⑤	④		④	④	④

自己点検・評価単位	分析項目 6-6-4	分析項目 6-6-5	分析項目 7-1-1	分析項目 7-1-2	分析項目 8-1-1	分析項目 8-1-2
学部	③		⑤	④	④	④
哲学・思想文化学プログラム		⑤				
歴史学プログラム		⑤				
地理学・考古学・文化財学プログラム		⑤				
日本・中国文学語学プログラム		⑤				
欧米文学語学・言語学プログラム		⑤				

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

## 2. 評価結果に対する総評

文学部の理念は、「人文科学の分野における幅広い基礎学力と専門知識を有し、鋭い感性と客観的視点に基づいて現代社会を的確に見据え、その発展に貢献できる人間性豊かな個性的人材を養成すること」にある。

この理念に基づき、本学部は次のような教育目標を掲げている。

- (1) 伝統的研究の成果と方法論を継承し、専門領域における基礎的研究を深化させる。
- (2) 新たな研究領域や学際的領域に常に注目し、幅広い研究を積極的に推進する。
- (3) 現代社会に対する鋭い問題意識を常に持って、研究を活性化する。
- (4) 外国語の運用能力を高めるとともに、専門領域の必要に即した情報処理能力を身につける。

(5) 絶え間ない自己改革を行う謙虚さ・柔軟性を養う。

(6) 人類の歴史を学び、国際平和の精神を重視する姿勢を培う。

文学部のこのような理念と目標に照らし、学士課程の自己点検とその改善に関する年次報告書を作成した。本学部の各プログラムでは、専門分野ごとの伝統的研究手法と内容とを活用して、学生各自が個別の研究課題を解決するという教育研究を実践している。したがって、卒業論文の自主的作成を到着点とする教育の実際は、個別指導中心にならざるを得ない。文学部における教育と研究のこうした特質から、本報告書では、

i. 各学生の研究技量・人間性が各自の入学時と比べてどれだけ高まったか

ii. 教育課程の成果が個々の学生の卒業後の進路にどれだけ貢献したか

の二面から教育成果を評価している。

以上を前提に、分析項目 1 から 8 の各項目について令和 3 年度の評価を試みたが、まずは本年度より年次報告書の作成主体を教務委員会から評価委員会に変更した点が特記されよう。これは、年次報告書が外部評価に用いられる機会が多くなり、評価の視点を一層求められていることに対応するためである。また、年次報告書をもとに、評価委員会が教務委員会に意見する形をとることができ、部局内で PDCA サイクルを組織的に回せる仕組みを構築し得ることも大きな理由である。ただし、評価結果自体は令和 2 年度のものとはほとんど差はなく、むしろ高い評価となった分析項目が複数あった。なお、文学部では令和 3 年度から英語で完結する **Humanities in English** プログラムを発足した。ただし、所属学生が 1 年生で教養教育の履修を主としているので、同プログラムの自己点検は来年度以降に実施することとした。

分析項目を具体的にみると、自己点検・評価の単位が学部であるものは 19 項目あり、うち 13 項目 (1-1-1, 2-1-2, 2-2-1, 2-2-2, 3-1-1, 4-1-1, 4-2-1, 5-1-1, 5-1-2, 5-2-1, 6-3-3, 6-5-1, 7-1-1) は「十分に適合する」、5 項目 (2-1-1, 4-2-2, 7-1-2, 8-1-1, 8-1-2) は「適合する」であった。分析項目 6-6-4 のみが、令和 2 年度に続いて「やや適合する」であった。この分析項目は、卒業生や進路先における関係者 (上司) からの意見聴取に関するものであり、その性格上、実施対象が少数になること、毎年の実施が困難であることが、中位の評価とした理由である。

自己点検・評価単位がプログラムの分析項目は 11 あり、すべてが「適合する」ないし「十分に適合する」という評価であった。この点は令和 2 年度と同様であったが、「十分に適合する」が増加しており、適正な教育活動が行われていると判断される。

令和 3 年度の教育活動全般を振り返ると、前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の状況に対応しながら教育活動を行った点を記さねばならない。授業は、大学の方針に沿って、対面授業、オンライン授業、ハイブリッド授業、オンデマンド授業を組み合わせせて開講した。フィールドワークを伴う実習・実験や卒業研究は、その実施場所選択や実施方法をコロナ以前のものから変更せざるを得ない場合もあった。ただし、教員も学生も、こうした状況にある意味で慣れてきており、文学部の教育実践にお

いて大局的には支障はなかったと判断している。ただし、学生のメンタルヘルスケアには、引き続き配慮が必要である。

なお、令和3年度には退職・離職により5名の教員が文学部を離れることとなった。しかし、令和4年度前期に着任する教員は2名であり、不補充分の授業をどう手当するかが大きな課題となった。これについては、人間社会科学研究科長に対して客員教員の措置要望を令和3年度中に行い、要求通り認めていただいて、授業の提供という点では事なきを得るに至った（研究指導面での人的不足は課題として残っている）。また、人文学におけるDX教育の推進として、令和3年度には試験的に「人文情報学入門」を開設した。同科目に対する学生のニーズ・評価は高く、令和4年度以降も客員教員担当であるが、恒常的に開設する科目とする決定をした。

最後に、文学部の独自性として、エビデンス化しにくい（あるいは出来ない）教育活動がある。例えば、卒論中間発表会、卒論審査後の公開発表会、卒論優秀者発表会など、カリキュラム上義務化されていないものや、教員や学生が私的に開催する研究会や読書会、大学院生との交流などである。これらは文学部、各プログラム、各専門分野の自主的な営みとして培われて来た伝統であり、人文学では有効な教育方法である。このような正規外の自主的かつ多様な取り組みは、年次報告書の分析対象とはなり難いが、今後も継承する所存である。